

『寛平内裏菊合』の方法

——和歌表現の再評価——

中 村 佳 文

一、序

仁和四年（八八八年）から寛平三年（八九一年）秋の間に行われたと考えられる『寛平内裏菊合』は、歌合の源流として物合の性質を持ち、その双方が結合する過程を示すものとして史的な意義が認められてきた。萩谷朴氏『平安朝歌合大成』によれば、「廿卷本目錄に「左右不読合」とある如く、歌合の事実は全くなく、むしろ純然たる物合に、ただそれぞれの州浜にふさわしい歌をよみ添えたという過ぎないものの如くである。総体、平安朝歌合の最も初期のものには、大規模な撰歌合が多いのであるが、このように最も素朴な形で物合に歌の付随しているのは稀少な例に属する。」と評価されている。即ち、物合であるが故に歌の優劣は問題とされず、「競技の焦点は完全に菊の州浜にあった」ものと考えられ、歌人や和歌表現にはあまり焦点が当てられてこなかったわけである。

しかしながら、『万葉集』には一首も見られなかった「菊」と

いう素材が、『懐風藻』や勅撰三詩集などの漢詩文では散見され、和歌としては平安朝になり、桓武御製の存在を経て、『古今集』では十三首の歌群が構成されるようになる。この歌群の多くの和歌が漢詩文表現からの影響を受けており、そのうち四首がこの『寛平内裏菊合』の歌である。このように漢詩文の素材であった「菊」を、新規な和歌の素材とするようになってきた時代背景で行われた歌合として、その和歌表現を考察すると、既成の和歌から撰歌したわけではなく、州浜の造形に適合するように新作されたものとも考えられている。その際に、州浜の造形が制作されるための典拠と、表現との適合においては、どのような関連性があつたのだろうか。本稿では、『寛平内裏菊合』（以下『菊合』）の主として歌人の判明している歌を端緒として、和歌表現の素材となつた漢詩文の典拠やその表現展開について指摘をすることで、歌人としての表現方法・和歌史的意義を浮上させ、「菊」という素材を対象にした、単なる物合ではなく歌合の和歌表現としての再評価を試みてみたいと思う。

二、左方道真歌と見立て

『菊合』の和歌は、左右それぞれ十首ずつ合計二十首である。この中で歌人が明確なのは、『古今集』所載により知りうる三首で、紀友則・菅原道真・素性法師の三人である。この『菊合』の主催者は宇多天皇であり、この三人は道真が漢詩文に於いて、友則・素性が和歌に於いて、様々な制作の場に供奉した人物である。とりわけ道真の『菊合』前後の動静としては、仁和二年（八八六）より讃岐守として赴任していたが、寛平二年に帰京している。したがって『菊合』に道真自身が京に戻り、歌を制作・供給しているという仮定をもとにして、実施年代も寛平二年か三年に限定する⁽⁴⁾とも考えられている。また、道真が漢詩文ではなく、和歌を天皇主催の行事の場に応じて詠んだとすると、その表現方法が漢詩文に対していかなるものであったかを考える視点も必要であろう。ここでは左方道真歌に注目し、その表現の根拠を考察していくことにする。まずは、菊合の本文を示す。⁽⁵⁾

左方。占手の菊は、殿上童小立君を女につくりて花に面かくさせて持たせたり。今九本は州浜をつくりて植ゑたり。その州浜のさまは思ひやるべし。おもしろきところの名をつけつつ菊には短冊にて結ひつけたり。

占手 山崎の水無瀬の菊

1 うちつけに水無瀬は匂ひまされるはをり人からか花のつね
かも

嵯峨の大沢の池 これよりは州浜 友則

2 一本と思ひしものを大沢の池の底にも誰か植ゑけむ
紫野の菊

3 名にしおへば花さへ匂ふ紫の一本菊における初霜
大堰の戸無瀬の菊 銀を繰りて滝におとしたり。いと高くよ
り落つれど声もせず。

4 滝つ瀬はただ今日ばかり音なせそ菊一花に思ひもぞます
津の国の田蓑の鳥 州浜に植ゑたる菊のしたに女袖を笠に着
て貝拾ふかたしたり。

5 田蓑ともいまは求めじたちかへり花の雪にぬれむと思へば
奈良の佐保川の菊

6 千鳥ゆゑ佐保の川べを求め来れば水底霧りて咲ける花かも
和泉の深日の浦

7 けふけふと霜おきまさる冬立たば花移るふとうらみにゆか
む

8 紀の国の吹上の浜の菊 萱丞相
秋風の吹上にたてる白菊は花かあらぬか波のよするか

9 磯に咲く網代の小菊汐間は玉とぞ求めむ波の下草
伊勢の網代の浜

10 この花に花尽きぬらし関川のたえずも見よと折れる菊の枝
逢坂の関の菊

左方八番目の道真歌は、「紀の国の吹上の浜の菊」という詞書を造形した州浜の菊に、結びつけられたものである。「吹上」は紀伊国の名所であり、その「吹き上げる」という意味を活かして、縁語として風や浪が詠み込まれる歌が多い。この道真歌において

も、上句で「秋風の吹上にたてる白菊は」とし「秋風が吹く」と「吹上」を掛けた表現になっている。以下、下句では、「花かあらぬか波のよするか」として「花なのかそうではないのか波が寄せられているのか」といった疑問の形式で「白菊」を「浪」に見立てている。この「花」を「浪」に見立てる発想は、「浪花」という漢語が道真の漢詩文に見られることから生じた表現展開と考えることができまいだろうか。『菅家文章』に三首見られる「浪花」の用例のうち、次に示す一八四番の一節は、道真の讃岐守赴任が決定し、任地に向かう船路を想定し、海上で〈浪〉そのものを対象物として「南海に咲く浪の花」と見立てた表現である。

若出皇城思此事 定啼南海浪花春（若し皇城を出でて此事を思はば 定に啼かむ南海浪花の春）

また、四六七番「海上春意」は、「蹉跎鬢雪与心灰」の表現から、老齡なる道真が海のとりで春意を叙すものである。「鬢雪」という比喩も見られ、その実際の対象物は「鬢」であり、結句に於いては、山花と相対的に照り映える「浪花」を表現する。これも海を想定した上で〈浪〉を対象物にして「花」に見立てた表現である。

蹉跎鬢雪与心灰 不覺春光何処來 染筆支頤閑計會 山花遙向浪花開

（蹉跎たり鬢雪と心灰と 覺えず春光何れの処よりか來たる 筆を染め頤を支へて閑に計會す 山花遙に浪花に向かひて開く）

この詩二首（一八四・四六七）に於いて「浪花」という語により表現される対象物は、〈浪〉に他ならず、「海」という場を想定した

上での表現ということができよう。

しかし、『菅家文章』一七一番は、その注に拠れば、仁和元年九月、道真が阿波守平某氏に随ひ鴨河西の小別荘で文章生に二十題を出させ即詠したうちの一首である。「水鷗」の題に対して詠んだ詩において、「浪花」を含む頸聯の対句の一方は、「飛びて秋の雪の落つるか」と疑ふで「鷗」を「秋雪」（が落つる）かと「疑ふ」という見立て表現である。当該句は、「鷗が群れ」集まつて水上に浮かんでいると浪の花が咲き匂っていることを談るようだと「鷗」を「浪花」（が匂ふ）かと「談る」として、「浪花」を「白い対象物」として〈鷗〉に見立てているという解釈をすることができよう。前の二例の詩では、対象物として〈浪〉そのものを表現していたが、この詩では題にある〈水鷗〉の見立てにしているといえよう。これは「浪花」の語が、本来「浪」そのものを白く美しいと表現する美称として機能していたが、「浪」を他の対象物に喩える方法として応用したと解釈することができる。即ち、「花のように美しい浪」という比喩表現を、「浪のような（白い対象物）花」に応用する方法と捉えることができる。事前に詩文の対象となる題が設定され、自然景を基調にしない観念的な詩文制作を要求される場に於いて、道真がこのような詩を即詠しているという状況は注意されよう。

双鷗天性靜 況遇得心人 逐歩高低至 尋声向背馴
飛疑秋雪落 集談浪花匂 殊恨秋天暮 相離不敢親
（双鷗天性靜かなり 況むや心得たる人に遇はむや 歩びに逐ひて高くも低くも至る 声を尋ねて向にも背にも馴れたり 飛びて秋の雪の落つるか

と疑ふ 集りて浪の花の匂ふことを談らふ 殊に恨むらくは秋天の暮に
相離れて敢へて親しまざることを(『菅家文草』「水鷗」卷第二 一七二)
以上の三例のうち一七一番、一八四番、二首の制作年代は、道
真が讃岐守赴任の直前であり、菊合の成立時期以前に制作された
詩文と考えられる。

また、「浪花」は詩語として、決して道真の造語ではなく、次
に示すように、李白や杜甫を始め、劉禹錫や白居易の詩文にも見
ることができ、全唐詩には少なくとも三十例を検出することがで
きる。

李白 「天門山」

岸映松色寒 石分浪花碎

杜甫 「望兜率寺」

霏霏雲氣重 閃閃浪花翻

劉禹錫 「雜曲歌辭 浪淘沙」

無端陌上狂風急 驚起
鴛鴦出浪花

白居易 「江樓晚眺景物鮮奇吟成篇寄水部張員外」

風翻白浪花千片 雁點青
天字一行

(ここに列挙したものを典型的な用例として、中国詩文における
「浪花」も、その表現される対象物は「浪」であり、「花」ではな
い。同様に道真詩においても、「海」を想定した詩作の場合、基
本的に中国詩文と同様に「浪」を「白く美しいもの」と表現する。
しかしながら、詩作の対象物が限定的に事前に題として設定され
た詩文で、「浪花」が使用された場合においては、「浪」そのもの
ではなく、設定された対象物の比喻として機能する表現展開とみ
ることができよう。『菊合』においても、州浜に提示された「菊」

を詠歌の対象とする前提がある上で、「吹上浜」という「浪」が
想定される状況を人工的に造形したがゆえに、「菊」を「花」か
「浪」かと疑問形式で見立てた歌といつてよい。

『菊合』では、続く左方九番の歌も、網代の浜の「菊」を対象
としての表現であり、「玉とぞ求めむ波の下草」から「白菊」を
「浪」に見立てる発想を、言語的想像上に展開した歌と見ること
ができるであろう。また道真歌以外で唯一歌人が明確な、左方二
番の友則歌は、「大沢の池」の池底に映る「菊」の影を表現した
歌である。

これら「花」と「水底」という関連と類似する発想の先蹤とし
ては、『万葉集』卷十九・四一九九番・大伴家持の「藤波の影
なす海の底清み 沈く石をも 玉とそ我が見る」という歌を挙
げることができよう。この歌は「藤波が影を映す海底に沈む石を
玉と見る」という発想の歌で、菊池威雄氏によれば、『万葉集』
中に「藤」を詠んだ歌は枕詞を除いて二二首、そのうち家持が長
短歌あわせて八首を占める。ことを指摘され、その形状から「遠
望しても一房を手にとっても藤波という言い方はふざわしく」と
し、家持以前から歌語として親しまれていたことを述べる。その
上で家持の「獨創性」として、「花」と「石」を「玉」とする見
立てを「二つの類型を結びつけ、イメージの立体化を図った。」
とし、「両者を統合したのが藤の紫である。」とされている。そし
てこの家持歌の「藤と水のモチーフ」を万葉での唯一の用例とし
て高く評価すべきであると述べている。

季節という視点からみれば、『万葉集』卷十・一九四四番、夏

の雑歌として「藤波の 散らまく惜しみ ほととぎす 今城の岡を 鳴きて越ゆなり」などに見られるように、「藤波」を春の終わりの花として散ることを惜しみ、ほととぎすの到来により夏を実感する歌がある。春と対照的な秋の歌には、「紅葉」を素材とするものは多く見られるが、前述したように『万葉集』には「菊」が詠まれた歌は皆無である。「藤波」の語は、一首の歌における発想というよりも、「藤」を形状的に類似する「波」と組み合わせることにより、歌語として定着していたものと考えられ、実際の「海」等と関連を詠む家持歌などは独創的な存在といえるだろう。

抑も、見立て表現を『万葉集』に於いて考えれば、「波」と「花」とに関係する表現は、「藤波」以外にも見ることができよう。例えば、巻六・九〇九番、養老七年吉野行幸における笠金村の歌には、「山高み 白木綿花に 落ち激つ 滝の河内は 見れど飽かぬかも」とあるように、滝の「波」立つ吉野宮滝の情景を「白木綿花」に見立てた歌がある。この歌は、あくまで詠歌の対象物は「滝」であり、眼前の実景である「滝」を「白木綿花に落ちたぎつ」という表現により、「神聖なるもの」と捉えて讚美する歌とされている。「白木綿花」を「浪」に見立てたという点では、卷十三雑歌・三三三八番に「逢坂を うち出でて見れば 近江の海 白木綿花に 波立ち渡る」の例を挙げることができるだろう。更には、卷三・三〇六番、養老二年伊勢行幸の際の安貴王の歌には、「伊勢の海の 沖つ白波 花にもが 包みて妹が 家づとにせむ」とあり、この歌を「旅先における家郷への恋情を、旅先の勝景である

「白波」を素材として歌う方法」と捉え、安貴王から笠金村にわたり「行幸従駕歌において歌い継がれた発想」であるととし、「大和の地に住む人々にとつて、波が一般に旅においてしか見ることができないものであったことも考慮されてよい」とする垣見修司氏の論を参考にすれば、旅の実景としての「波」を「花」と関連づけることが、既に『万葉集』にも詠歌方法として見られることが視える。あくまで万葉歌は、いずれも実景としての「滝」や「浪」を対象物として表現された歌であり、行幸などによる特別な旅という状況下で「波」を表現することに歌の主眼があると言えよう。

『菊』左方の和歌は、「白菊」の比喩的な表現方法として、「浪」や「池底に映る菊」が用いられるが、他の歌でも、「霜」「霧」「雪」「滝」「川」など、水が白く変化したものを（白菊）の見立てとしている。和歌史的に見れば『万葉集』に於いて、その形状の特異性から「藤」の花を「波」に見立てた「藤波」という歌語が散見されることや、実景としての「滝」を「白木綿花」に見立てた歌を見ることができた。これは見立て自体が、『万葉集』以来の和歌表現の一方法としてその根底に存在すると考えることができよう。それを背景に持ちながらも、和歌の素材としては新規な「菊」を対象物として、その見立てとなる可能性のある素材の発見を求めた作歌活動が、存在したと考えられるのではないだろうか。即ち、実景ではなく人工的に造形された自然を対象物として、その自然に必然性をもたらすために模擬的な名所を配し、それぞれの詠歌対象は「菊」に限定されるという「場」において、新たな見立ての醸成が行われ、従来、あまり制作されなかった「菊」の和

歌に、様々な詠歌方法を見出していくことを模索したのではないだろうか。左方の和歌表現は、『万葉』以来の和歌の伝統と漢詩文素材であった「菊」の融合という、同時代の要請に⁽¹³⁾応えたものと評価することができるだろう。

三、右方友則・素性歌と漢籍故事

前項で考察した左方は、州浜の菊に対して見立てと名所を取り合わせた歌が並ぶのに対して、右方の友則・素性の歌は、「菊」に関する漢籍故事を素材とした和歌となっている。菊に関する故事は、外来の花であることから主として漢籍故事であり、嵯峨朝の勅撰漢詩集に所載される詩文に現れ、その後、日本漢詩文に定着してきた表現である。まずは歌合本文を示す。

右方。これも殿上童藤原の繁時阿波守弘陰が息、かくて菊ども生ほす
べき州浜をいと大きにつくりて一つに植ゑたれば、持て出づるに所狭
ければ、おしあはせては一つになるべく構へて、割りて輪をつけて一
度におしあはせて出ださむとかまへたるを、左の方の一本づつ出だす
におどろきてたびたびに出だしければ、合はせてはたればいとおもし
るきところ一つなれど、合はするほどは割りていと片はなり。占手の
歌本文にあることどもとなり。

11 山ふかく入りにし身をぞいたづらに菊の匂ひに憩へ来にけ
る

12 飲むからに親子の中もわかれずときくたに水をひきて流せ
り

13 今とはて車かけてし庭なれば匂ふ草葉も生ひしげりけり

14 すめらぎの方代までしませからは給ひし種を植ゑし菊なり

15 菊の水齢を延べずあらませばさともあらさで今日あはまし
や

16 かくばかり雲の上高くのぼれば駆ける鳥だにあらじとぞ
思ふ

17 濡れて干す山路の菊の露のまにいつか千歳をわれは経にけ
む
仙宮に菊をわけて人のいたれるをよめる。素性法師

18 秋果てて冬はとなりになりぬとて飽かねば菊を匂ひくはふ
る

19 万代を菊の種とや時きそめて花みる毎にいのり来にけむ
菊の花のもとにて人をまてるかたをよめる。友則

20 花見つつ人まつときは白栲の袖かとのみぞあやまたれける
本朝漢詩文において「菊」が素材となるのは、やはり重陽宴に
おける詩であり、『凌雲集』嵯峨天皇を初出として散見される。

「九月九日於神泉苑、宴群臣、各賦一物得秋菊」
曼商季序重陽節 菊爲開花一宴千官 藁耐朝風今日笑

采露^二夕露^一 此時寒 把盈^二玉手^一 流^レ香遠 摘入^二金杯^一 辨^レ色難
聞道仙人好所服 对^レ之延^レ寿動^レ心看

(曼商の季序 重陽の節 菊を開花せむが為に千官を宴す 藁は朝
風に耐へて今日笑む 采は夕露に霑ひて此時寒し 把りて玉手に盈
てては香を流ふること遠し 摘みて金杯に入れば色を辨くこと難
し 聞道く仙人好みて服する所ぞ 之に对ひて寿を延べむと心を動
かして看る)

この詩の中には、「把盈玉手」の語が見えるが、これは「藝文
類聚」九月九日の項「陶潜の故事」を典拠とするものである。内
容は、陶潜が九月九日に酒が無く、自宅近くで菊を摘んでいて、
白衣の使い王弘が現れて酒を贈ったというものである。

続晉陽集曰、陶潜嘗九月九日無^レ酒。宅辺菊叢中、摘^レ菊盈^レ把。
坐^二其側^一久、望見白衣至。乃王弘送^レ酒也。即便就^レ酌醉而後
帰。

(続晉陽集に曰はく、陶潜嘗て九月九日に酒無く、宅辺にある菊叢
の中、菊を摘み把るを盈つ。其の側に坐すること久しくして、望み
見れば白衣至る。乃ち王弘酒を送るなり。即便ち酌み就へて酔ひて
後に帰る。)

二十番の友則歌は、陶潜の立場から「花」を見て「人を待つ」
時は、白菊の花が「白栲の袖」かと思間違うほどだと解釈でき、
この漢籍故事をふまえないければ理解することができず、「陶潜の
故事」が、菊花の故事として和歌表現に翻案された例といえよう。
さらに、前掲、嵯峨天皇の詩文にも見える「延寿」も菊花の故
事として頻出するが、より故事としての具体性を帯びて定着して

きたものとして、「酈県菊水の故事」がある。この故事の日本漢
詩文における初出は、『経国集』に見える嵯峨天皇に応製した滋
野善水の「雑言。九日菊花篇応製一首」の一節であり、『藝文類聚』
が典拠とされる。

盈把^二隨陶元亮^一。登高欲^レ訪費長房。浪^レ英閑作湘南客。飲^レ
水延^レ年酈北郷。

(盈把隨はむとす陶元亮。登高訪はむとす費長房。英を浪らひ閑か
に作る湘南の客。水を飲み年を延ぶ酈北の郷。)

* 『藝文類聚』卷八十一・菊 及び 『初学記』卷二十七・寶
器部・菊

風俗通曰、南陽酈県、有^二甘谷^一、谷水甘美、云^二其山上大有^レ菊。
水從^二山上^一流下。得^二其滋液^一、谷中有^二三十余家^一、不^レ復穿^レ
井。悉飲^二此水^一、上寿百^二三十^一。中百^二余^一、下七八十者。名^レ之
大天、菊華輕^レ身益^レ氣故也。

(風俗通に曰はく、南陽酈県、甘谷有り、谷水甘美にして、其山上
大いに菊有りと云ふ。水山上より流れ下る。其の滋液を得ること、
谷中三十余家有り、復た井を穿ちず。悉く此の水を飲む、上寿は百
二三十。中は百余、下は七八十者。之を名づけて大天とし、菊華身
を軽くして氣を益する故なり。)

南陽酈県の谷の水は美味く、菊花がある山上から流れ出てく
る。この谷にある家々では井戸を掘ることもなく、この水を飲んで
おり、それによりかなり長寿な人々が居るという故事である。
十一番の「山ふかく入りにし」や、十六番の「雲の上高くのほれ
れば」という表現は、酈県の山上を想起したものであろう。また、

十二番・十五番は「菊の水」を直接和歌に表現しており、それにより「齡を延べ」ることが関連づけられる。

これらの漢籍故事は、前述してきたように嵯峨朝の勅撰漢詩文集から定着してきたものであるが、もちろん菊合と同時代の漢詩文にも表現されている。例えば、道真が十六歳の時に制作した「殘菊詩」にも「已謝陶家酒 將隨酈水流（已に陶家の酒を謝せり 將に酈水の流れに隨はむ）」（菅家文章 卷第一・三）と「陶潛」酈泉」の故事が対に表現されている。また紀長谷雄の詩序「九日侍宴觀賜群臣菊花心製」にも「滄落英者養其生 飲滋液者却其老 故谷水洗花 汲下流而得上寿者三十余家 地脈和味滄日精而駐年顏者五百箇歲（落英を滄む者は其の生を養ふ 滋液を飲む者は其の老を却く 故に谷水花を洗ふ 下流を汲みて上寿を得る者は三十余家 地脈味に和す 日精を滄みて年顏を駐むる者は五百箇歲）」（本朝文粹 卷第十一 詩序四・草）と「酈泉」の故事が見えており、重陽の折などに菊花を漢詩文に表現する場合の典故として使用されていることが窺えるであろう。

次に十七番素性歌は、「王質の故事」を典故として表現したものである。信安郡石室山で、王質が木を切りにはいと、童子が囲碁をうち、歌を歌っている。その童子から与えられた実を王質が服用すると、空腹を感じなくなると言う。その後、王質が童子に言われ気づいてみると、自分の斧が朽ちるほど時間がたっており、帰ってみたら誰もその時代において、王質が知っている人はいなかったというものである。

信安郡石室山、晉時、王質伐木至、見童子數人碁而歌。質

因聽之、童子以二物与質、如棗核。質含之不覺飢餓。童子謂曰、何不_レ去。質起視斧柯_レ尺爛。既歸、無復時人。（『述異記』上『叢書集成初編』）

（信安郡石室山に、晉時、王質木を伐るに至るに、童子數人碁をして歌うのを見る。質之を聴くに因りて、童子一物を以て質に与ふるもの、棗核のごとし。質之を含み飢餓を覺えず。童子謂ひて曰はく、何ぞ去らざる。質起きて斧柯を視るに尺く爛る。既にして歸る、復た時人無し。）

この故事は、次に挙げる『古今集』（雑下・九九二）所載で『友則集』⁽¹⁵⁾に見られる歌に「碁打ちなどしける人の許に」という詞書を伴い友情を詠む歌に典故として使用されている。「京にのほりて」と詞書にあるように、友則にとつて「ふるさと」であるはずの京を「みしごともあらず」とし、むしろ「筑紫にありし時」に「斧の柄の朽ちし」まで長い時間、碁を共に興じた馴染み深い人が「恋しかりける」という歌である。「王質の故事」を自己の「京―筑紫」を往還した体験に沿い、和歌として再構成した方法を読み取ることができよう。ただし、和歌として一首の独立性には乏しく、故事の内容を理解していなければ解釈が困難であり、漢籍故事に依存した和歌表現ということができると思われる。

筑紫にありし時、碁打ちなどしける人のもとに、京にのほりてやりける

ふるさとみしごともあらず斧の柄の朽ちし所ぞ恋しかりける（『友則集』五八）

また、『伊勢集』一七三番の屏風歌と見られる詞書を持つ歌に

続く一七四番歌の詞書に、「暮うちたるに」とする和歌があることから、同時代にこの故事が屏風絵として描かれていたことを想定できるだろう。素性の和歌の詠法という観点で見れば、屏風絵を素材とし、そこに描かれた内容の想像的展開を表現していくという点を、稿者は以前に指摘したことがある。屏風絵を一面面として画中の景物を基点として、その前後に敷衍する時間的空間的な素材を一首に表現する方法である。

屏風に

終夜物おもひたる女つらづゑをつきてながむるに

よもすがら物おもふときのつらづゑはかひなたゆさもしらず

ぞ有りける〔伊勢集〕一七三

暮うちたるに

斧の柄の朽つばかりにはあらねどもかへりみだにもみる人の

なさ〔同・一七四〕

このように、右方の和歌は、嵯峨朝以来の日本漢詩文に定着してきた菊花の漢籍故事の断片を翻訳的に表現しており、故事の内容を理解していなければ、和歌の解釈が十分にはし難い表現となっている。歌合の詞書にも「州浜をいと大きにつくりて一つに植ゑたれば」とあり、漢籍故事の集合体として様々な状況を造形した大きな州浜を一つ制作し、州浜が大き過ぎるために「割りて輪をつけて一度におしあはせて出ださむとかまへたるを」と表現されている。これに対して左方が、一本ずつ出してくることに「おどろきて」小分けに出したので、大きな故事の集合体として趣向を凝らしていたはずの州浜なので、「合はするほどは割りていと

片はなり」と表現されているように、分割することで断片的な中途半端なものになってしまったと解することができよう。実際に、右方の和歌表現を見ても、一首一首の表現のみでは、十分な独立性を以て解釈することは困難であり、漢籍故事に含まれる様々な局面や事象を、詠歌対象としているという前提が不可欠になるといえる。中国詩文に典拠を求めてきた嵯峨朝の勅撰三詩集所載の日本漢詩文以来、権威的に定着した漢籍故事を、翻案として和歌にする方法と考えることができるだろう。

こうした意味で、『友則集』の歌として示したように、故事として共有された内容を自己の状況に置き換えた方法。また『伊勢集』の歌として示した、屏風絵に示された漢籍故事を素材として詠歌対象とする方法に通ずるものと解することができる。こうした方法は、翻案としての要素が強く、左方のように「名所」「修辞技巧」「見立て」を駆使した表現方法の構築と比較すると、単純かつ浅劣なものといわざるを得ないだろう。

右方の和歌は、重陽宴を中心とした日本漢詩文で表現されてきた「菊花」の漢籍故事の総体を素材として、それを断片的に一首一首の和歌表現に翻案することを試みた和歌群であるといつてよい。

四、結語

以上のように、『寛平内裏菊合』は、その左方と右方で異なる趣向の和歌が合わせられている。もちろん、その優劣を競う歌合として行われたわけではない。だとすれば、左方・右方で合わせ

ることに、どのような意義を見いだすべきであろうか。

州浜の造形を中心にした「物合」としての面から考えるならば、左方は「おもしろきところどころの名をつけつつ菊には短冊にて結いつけたり」とあるように、名所による州浜の造形に、一本ずつの菊を配している。その一本の菊と「おもしろきところどころの名」における景物との関係で、どのような見立て表現をするかという点が、ここで詠まれた新作歌の趣向の焦点であろう。その見立て表現は、『万葉集』以来の和歌の伝統を底流に保ちながら、それまでは漢詩文のみでしか表現されてこなかった、外来の花である「菊」を詠歌対象とするために、「浪」をはじめ水の白く変化した状態を比喻とする発想を求めている。その一端として道真が漢詩文に使用した「浪花」という語のあり方を考えてみたわけである。道真の漢詩文表現は、白居易・劉禹錫らの中唐の詩人の表現を学び展開しているものが多いが、その上で道真なりの摂取・消化・使用の過程を看取することができるだろう。従来、見立て表現の発想自体が漢詩文に学んだものとする指摘があるが、名所と州浜の造形との取り合わせと、掛詞・縁語・物名といった修辭技巧を導入することで、独自の和歌表現を創作していくことを意図した、まさに歌合の場そのものが見立て表現を醸成する場であるといえるのではないだろうか。

一方で、右方の和歌は、日本漢詩文に定着していた故事を断片的に翻案したもので、州浜の造形を見ても、大きい州浜を一つ作り、一カ所に菊を植えてあるわけである。これは、一首一首の独立性を重んじるというよりはむしろ、全体で嵯峨朝以来の漢籍で

共有されてきた菊花の観念を具象化しているといえる。したがって、漢籍故事の翻案は断片的なもので構わず、既成の故事として存在する菊花の観念を確認すべく表現されたものといえよう。これは、外来の花である「菊」という素材を表現するにあたり、漢籍故事の観念や表現を享受した日本漢詩文を「漢」の総体として、形象化しようとした意図があるといえよう。

時に寛平年間、道真の讃岐からの帰任の時期に重なるように、宇多帝が漢詩文のみならず和歌の文雅を求め始めた時代状況を見ることができよう。公では宇多帝を中心に重陽宴を始めとする菊花の宴が催されることと、道真の詩に表現された「菊花」に対する愛好が相互に影響し合い、「菊」の詩文表現において試行する場が求められた¹⁸⁾。道真は、漢詩文では白居易周辺の詩人たちの新規な表現を多く取り入れた。その一方で、公の場では影を潜めていた和歌に、道真を含めた宇多帝知遇の歌人たちが、修辭としての新規な見立て表現の発見と漢籍故事の翻案を対峙させるといった趣向を凝らすことによって、漢詩文に匹敵する力を与えていこうとしたのではないだろうか。

宇多帝代においては、このような文芸的趣向から、漢詩文と和歌の双方への意識が隆起し、道真らによる漢詩文表現の錬磨と共に、歌人たちにより漢詩素材の和歌表現への移植が積極的に行われたといつてよいだろう。「寛平内裏菊合」は、公の場で和漢を対峙すべく、漢詩素材を二通り、即ち、「名所において、掛詞・縁語・物名」という和歌の特徴を活かした修辭技巧を駆使しつつ、『万葉集』以来の見立ての伝統を継承しながらも、道真などの同

時代の日本漢詩文から発想を得た、菊の見立て表現を取り合わせ
独立した一首を構成する」と「嵯峨朝以来の日本漢詩文に権威的
に定着してきた、主に中国の類書に見られる漢籍故事に依存し、
その一場面の解釈を和歌として翻案し断片的に再構成する」とい
う方法で和歌表現に転化した趣向を持つ歌合であった。よって単
なる物合としての和歌史的評価のみならず、「和漢対峙」という
時代的な意義を生み出していく布石となるべき公的行事として、
和歌表現史の上で積極的な評価を与えるべきであると考えらる。

注(1) 萩谷朴氏『平安朝歌合大成二』(増補新訂 一九九五年五月 同
朋舎出版)

- (2) 小論『古今和歌集』菊の歌群致―宇多朝文壇の漢詩と和歌―
〔平安朝文学研究〕復刊第八号 一九九九年十一月
- (3) 道真は宇多帝の知遇を受け、多くの場で漢詩文制作をしているこ
とは「菅家文章」を見れば明らかであり、また道真・素性が交流し
和漢対峙の意識が具現化された場としては「宮滝御幸」がある。「宮
滝御幸」に関しては、小論「宮滝御幸記」の叙述と和歌表現〔『日
記文学研究誌』第九号 二〇〇七年三月 日記文学研究会〕に詳し
い。
- (4) 萩谷氏、注(1) 前掲書。
- (5) 萩谷氏、注(1) 前掲書。根幹本文、甲本 \times 十卷本による。
- (6) 「見立て」の古今的展開を述べた論考としては、渡辺秀夫氏『平
安朝文学と漢文世界』(一九九一年一月 勉誠社) 第一章「古今集
歌の表現形成と漢詩文」(II)「古今集歌の表現と漢詩」四九頁「古
今集歌の表現」(二) 譬喩と見立て \times その古今的展開」がある。渡辺
氏の論考では、漢詩の譬喩表現「誤」の和説の上に成り立つ、「あ
やまたれける」という表現やその展開を指摘されており、漢詩文か

ら和歌表現への移植を考える上で示唆に富む。本稿にも関連する一
例を挙げておくと、「句題和歌」の「風翻白浪花千片」という題
に対して「沖つより吹き来る風はしらの花とのみこそ見えわた
りけれ」の和歌表現について「翻説(説明)」によるものとして、「譬
喩的な表現性を説示、強調しようとする」とされている。

(7) 『菅家文章』の本文は、川口久雄氏 日本古典文学大系『菅家文
草 菅家後集』(一九六六年十月 岩波書店) に拠る。一部訓読は、
私に改めた箇所がある。

(8) 白居易の用例に関しては、訓読すると「風 白浪を翻して花千片」
となり、「浪花」という語の使用例としては不適切であるが、一句
を通して「浪」を「花」に見立てる漢詩の用例として挙げておくこ
とにする。注(6)でも渡辺氏の論として言及したように、「句題
和歌」においてはこの一句が和歌に翻訳されており、見立てによる
比喩表現と成り得ていることを付言しておく。

(9) 『万葉集』の本文は、『新編日本古典文学全集 万葉集一〜四』(一
九九四年〜一九九六年 小学館) に拠った。

(10) 菊池威雄氏「藤波の影―大伴家持の越中秀吟―」〔『日本文学』五
一 二〇〇二年九月〕

(11) 岡内弘子氏「吉野離宮に幸す時に、笠金村が作る歌一首―養老七
年夏五月―」〔『万葉集研究 第二十七集二〇〇五年六月 塙書房』

(12) 垣見修司氏「養老七年吉野離宮行幸従駕歌」〔『万葉』第七十一
号 萬葉学会 一九九九年十一月〕

(13) 注(2) 前掲小論

(14) 小島憲之氏「国風暗黒時代の文学 下II」(一九九五年九月 塙
書房)。本文の脱字は、訓読表記の中で小島氏の校訂・注釈により
補った。

(15) 『友朋集』および『伊勢集』の本文は、『新編国歌大観』によった
が、私に仮名を漢字に改めた箇所がある。

(16) 小論「形をかけりけるを題にて」致「古今集」二九三番・素
性歌の表現位相」〔平安朝文学研究〕復刊第十四号 二〇〇六年

三月)

(17) 渡辺氏、注(6) 前掲論文。

(18) 「菊花」における漢詩文表現が醸成された場の指摘としては、小
論「宇多朝の残菊宴賦詩」(『平安朝文学研究』復刊第十五号 二〇〇

〇七年三月)において、宇多帝代における菊花宴賦詩の場を想定し
ている。また、「九月尽日」との関連に言及された論考として、北
山円正氏「菅原道真と九月尽日の宴」(『菅原道真論集』勉誠出版
二〇〇三年二月)がある。

新刊紹介

吉原浩人・王 勇編

『海を渡る天台文化』

日中交流史は非常に長く、五七年光武帝から金印を賜ったことに始まる。以来、幾度となく使節が送られ、日本は大陸の進んだ文化を摂取し国家体制を整え、古代文化の繁栄を築いた。しかしその輝かしい背後には、留学者の労苦があり、海難事故で多数の人命が失われたという事実もある。命がけの旅をしてまで異文化摂取に努めたことは、現代の我々の肺腑を突く。

仏教は五三八年に公伝し、国内に弘通していった。殊に伝教太子最澄によつて開かれた天台宗は、平安前期、その弟子円仁・円珍らの入唐により台密が完成、中期に源信が『往生要集』で天台の観想念仏を説き、法然や親鸞以外に文学にも投射した。後期には日宋僧寂昭・成尋らの活躍もある。こ

こからも天台教学を学ぶために多くの学僧が海を渡り、教学発展に多大な貢献をしたと同時に、日本文化全体にも足跡を遺したことが分かる。これらについて、従来は天台の教理・教学中心の仏教学的研究、あるいは入唐・日宋僧の動静を中心とする歴史的研究が中心であったが、本書は、天台の思想や教学、そして影響下にある文学や漢籍交流といった専攻分野にとらわれることなく集まった研究者による、多角的かつ巨視的な視点から「天台文化」をとらえようとする非常に意義のある論文集である。

(二〇〇八年二月 勉誠出版 A5判
四四八頁 税込六三〇〇円) [柳本真澄]

熊谷直春著

『古今集前後』

本書は、『平安朝前期文学史の研究』(平成四年)、『万葉集の形成』(平成一二年)に続く、著者の第三論文集である。前著二

冊の内容を踏まえつつ、書名からも明らか
なように、『万葉集』以降「拾遺集」まで
の和歌史に焦点を当てた論考が収められて
いる。いずれも、未解決な問題や誰も気付
かなかつた謎の解明に挑んだり、誤りと思
ひの有力説・定説の訂正を試みたりした意
欲的なものである。

全八章の題目を掲げると、第一章「万葉
集から古今集へ」、第二章「桓武・平城天
皇の和歌」、第三章「国風暗黒時代の和歌
史」、第四章「六歌仙時代の和歌と歌人」、
第五章「古今集の成立とその周辺」、第六
章「梨壺における事業の真実」、第七章「拾
遺抄(集)」に関する新論、第八章「古今
和歌六帖の諸問題の解決」となる。収載
された論文の総数は、計五三編にも及ぶ。
『古今集』前後の時代を見据えた著者の熱
意が感じられる、まさに大著と言えよう。

(二〇〇八年二月 武蔵野書房 A5判
八二四頁 税込一〇五〇〇円)

[鈔 武彦]